

聖ペトロ・聖パウロ使徒の祭日の説教

鹿児島カテドラル・ザビエル教会 2022年6月29日

今日は、鹿児島教区で共に働いて下さっている神父さま方とともに捧げる久しぶりのミサです。神父様方は、毎日ミサを捧げるたびに、鹿児島の司教の名前を口に出して祈ってくださっています。今日は私こそ、皆さま方のために神様の祝福をお祈りする機会にしたいと思います。それは教会の礎である聖ペトロと聖パウロの祭日に相応しいことでもあります。

さて、今日お話したいことは、屋久島に上陸したシドッチ神父様のことです。シドッチ神父様は、ご存じの通り、約300年前、キリスト教禁教令が敷かれている最中、日本へ潜入してきた神父様です。彼はすぐ捉えられ、長崎、江戸へ送られ、江戸にある切支丹屋敷で獄死しました。理由は、彼をお世話した、長助とはるに洗礼を授けたためでした。禁教令を犯した者というものでした。

8年前、江戸の切支丹屋敷跡から3体の骨が発掘され、これらは、シドッチ神父、長助、はる、のものであると文京区埋蔵委員会がマスコミに公表しました。このニュースはすぐに世界中に流布し、注

目されました。折よく、シドッチ神父の故郷であるシチリア島の
パレルモ教区司祭マリオ・トルチヴィア神父の下に届きました。
彼はシドッチ神父の研究者でシドッチ神父についての論文を上梓し
たばかりでした。そして、3年前にその論文は日本語に訳され、出
版記念講演会が、上智大学と東京都文京区埋蔵委員会の共催で開か
れました。

今、屋久島の教会に「シドッチ記念館建設」の計画が進められて
います。主催者は地元のNPO法人ですが、私もその法人の理事の
一人になっています。その法人の代表は古居智子さんで、小説
「密行 最後の伴天連シドッチ」の作者です。

この古居さんが私に言いました。

「シドッチ神父を顕彰し、多くの人々に知らしめるのには教会の者
ではない私たちには限界があります。シドッチ神父のことを詳しく
知るためにはどうしてもカトリック教会側からの説明が必要で
す。」と。

実は、パレルモ教区は「シドッチ、長助、はる」の列福・列聖の
申請をバチカンに提出しています。この様な流れの中で、私はシ

ドッチ神父を以下のような観点で教会内外の人たちに紹介することにしました。

- ①彼はまず、司祭であること。そして宣教師であったことです。
その意味は、司祭は一生を通して、神のみ旨に従う人であること。彼はパレルモ教区司祭でした。
- ②長じて教皇庁福音宣教省に勤務していたこと。
- ③そこで、禁教令の中で、迫害に苦しんでいる日本の信者たちの現状を知ることになる。
- ④教皇の親書をもって日本を訪れ、日本国王にキリスト教解禁を訴えようとする。
- ⑤しかし、教皇庁はそのアイデアに反応しなかったため、単独で、インド経由で、フィリピンにわたり日本潜入の準備をする。
- ⑥フィリピンで慈善事業や神学校設立など才能を発揮していたので、上部の方からフィリピンに留まるよう説得される。
- ⑦しかし、それを振り切って日本へ向かう。
- ⑧新井白石との取り調べの中で、潜入の目的はキリスト教の解禁であることを明言する。
- ⑨新井白石との尋問は穏やかに進んだので、オランダ人の通訳が

江戸幕府はキリスト教を解禁するかもしれない、とのニュースを西洋に送る。

- ⑩ これを聞いた教皇庁はシドッチ神父を教皇代理への身分に変える文章を発送する。しかし、その文書が届いたとき、シドッチ神父はすでに亡くなっていた。

これらの事情を考察すると、私は聖書の中の2か所が脳裏に浮かびます。

一つは、モーセの召し出しの場面です。

主は言われた、「私は、エジプトにおける私の民の苦しみをつぶさに見、追い使う者の前で叫ぶ声を聞いて、その痛みを確かに知った。それで、私は下って行って、私の民をエジプトの手から救い出す。（中略）今、イスラエルの人々の叫びが私の下に届いた。私はエジプト人が彼らを虐げているのを目の当たりにした。さあ行け、私はあなたをファラオの下に遣わす。私の民、イスラエルの人々をエジプトから導きなさい」

（出エジプト3，7～10）

もう一か所は、復活したイエスによる弟子たちの派遣です。

「父が私をお遣わしになったように、わたしもあなた方を遣わす」（ヨハネ 20, 21）という場面です。

私たち司祭は、みな宣教師であるべきです。

その意味は、天の父のみ旨を行うために教会を通して現場に派遣されているからです。

神様の慰めと祝福が皆さんの上にありますように。アーメン